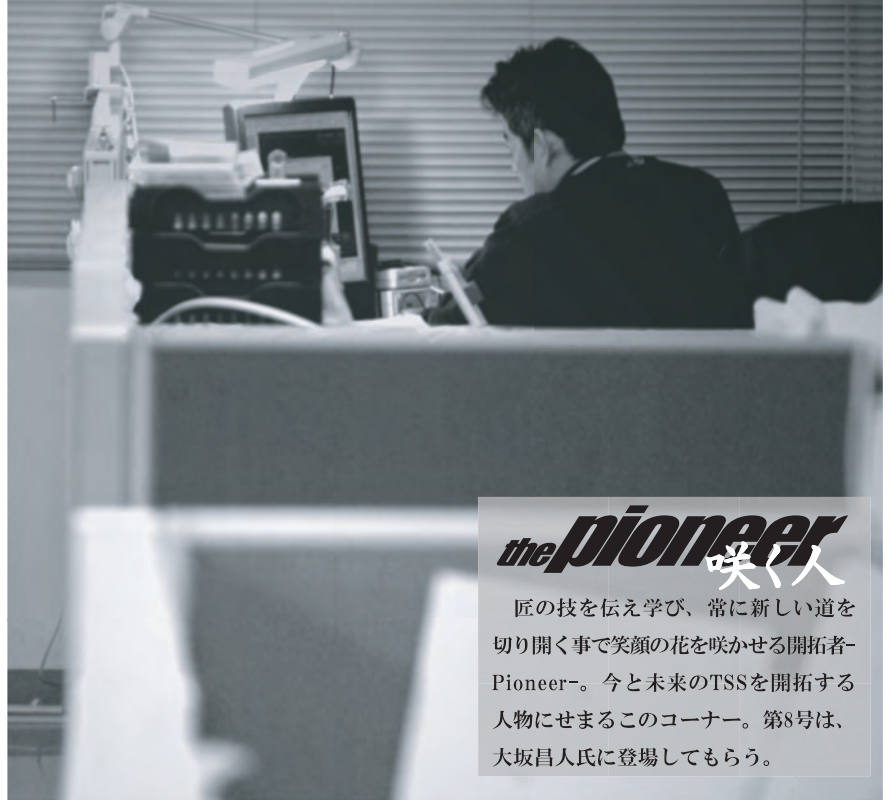


自分の考えで 色々な経験を積んでほしい



the pioneer 喰い人

匠の技を伝え学び、常に新しい道を切り開く事で笑顔の花を咲かせる開拓者-Pioneer-。今と未来のTSSを開拓する人物にせまるこのコーナー。第8号は、大坂昌人氏に登場してもらおう。



大坂 昌人
Masato Osaka

とにかく、喰いついたら徹底的な人である。お客様が氏を称する言葉は「粘り腰」・「とことんやる人」・「大坂さんが担当なら仕事を出す」。お客様に毅然と答える姿には、数ある無理難題に「結果」で応えてきた男のみが発するエンジニア魂がそこはかどなく漂う。仕事に直向で、苦難の時ほど力溢れる大坂昌人に、尊敬の念を持ちながら喰いついていきたいと思う今日この頃。(文章 夏川文夫)

入社 そして怪我の苦い思い出

「小遣いを貯めてはパーツ買って、自転車改造して。高校は、元々車やバイクとかの機械系が好きだったから。早く自立したいって思ってたのもあるし。」

何かを作ることが大好きだった大坂少年。お金が無い分、創意工夫でモノ作りへの興味を深め、高校は機械科に進学。卒業後、東京精研社に入社し、その後二年間は、東京の池上工場で夜間学校に通いながら働いた。

入社して一年、ある展示会に行った大坂。直帰しても良かったのだが、たまたま早く終わったので、「仕事してから帰ろう」と、会社

に戻った。

その日の大坂の仕事は、フライス盤を使った部品加工。このフライスと言う作業は、削る刃の研ぎ具合が、そのまま切粉の状態に反映される。つまり、切粉の状態が良ければ、刃が上手に研がれている証拠となるのだ。この日、自分で研いだ刃を使っていた大坂は、切粉の状態を非常に気にしていた。

出てくる切粉を、手でかき集めては観察、かき集めては観察。いつもの風景と思っただけ、その時「バチン！」聞き慣れない音が低く響いた。「どうしたの？」と掛けられた声に、「…やっちゃいました」と、笑って答える大坂。巻き込まれた彼の左親指は、切断寸前の状態に――。

「回転が速いから、刃が見えなくて、深く手

を入れすぎちゃってね。また繋がったから、ラッキーだけど…でも、自分に対して悔しかったし、周りに心配かけたし。苦い思い出だね。」

積極的な学び 考える癖 自分の考えに対する自信

”人の仕事を見て覚える”は、過去に紹介した匠の共通の極意。大坂も例外ではないが、加えて、積極的な学び”も不可欠だと語る。

『分からない部分を必要な場面ではアリだけど、全てがそれじゃダメだと思う。今必要でなくても、観察して記憶に留めたり、本で調べたりしておく。そうすると、教育の時もお互い楽に、実になって終わる。そんな姿勢で、アンテナ張っておくべきだよ。そうす

れば、他の部署の人の気持ちも分かるしね。」さらに大坂が重視するのは、”自分で考える癖をつけ、失敗を繰り返す”と言うこと。この積み重ねの有無で、諦めた時や、迷った時に差が生まれてくると言う。

『自分で考えたけど、この先が分からない』とか、『考えてみたけど、自信が無いから見て欲しい』とかが好きだな。壁に突き当たっても、しつこく考えられる様に…、考える癖”を持って、自分の解決パターンや段取りを作っていて欲しい。その癖が無いと、ギブアップする時に、何をどうすれば良いか、どこを攻めて良いか分からない状態になる。ギブアップも色々だから、次に繋がるものにして欲しいね。」

「失敗を繰り返すっていうのは、自分の考えに自信を持った上で経験してくれてこと。経験して、自分の考えを持って、調べた情報を持つて、未経験の難しい部分を推理して、いくつかの仮説を天秤にかけながら進む。その時に、自信が無いと止まるでしょ。最近では、精度の高い分析が求められるから難しいけど、それでも自信持ってやらないと、ずっと答えが出せないし、失敗しても印象に残らないから、糧にもならないんだよ。」

最後に、技術開発について話してもらった。「ゴールは無い。仮のゴールはあっても、数年後には通用しないから。ただ、前だけ見てもダメ。基礎技術あつての最先端技術だから、基礎をしっかりと持ちつつ、日々改良。でもね…良いアイデアがあっても、ぶっつけ本番でやる訳にはいかないじゃない。時間やお金の余裕とか。そうすると記憶から消えていくしね…『納期待った無し』だと、さらにリスク回避せざるを得ないし…最近特に。難しい時代になったよな。」(敬称略)